

# St. Luke's International University Repository

## Transitions of Nursing Student's Uniform for Practicum at St.Luke's College of Nursing.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萱間, 真美, 成木, 弘子, 片平, 好重 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/293">http://hdl.handle.net/10285/293</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 聖路加看護大学における学生の 実習用ユニフォームの変遷

ユニフォーム検討委員会 変遷資料作成担当

萱 間 真 美<sup>1)</sup>

成 木 弘 子<sup>2)</sup>

片 平 好 重<sup>3)</sup>

### I. はじめに

本学のブルーのユニフォームは、伝統ある聖路加の象徴として親しまれてきた。「ブルーギャング」、「ブルーエンジェル」という看護学生の愛称もこのユニフォームと一体となってつけられたものである。あの独特の色の中に学生時代のたくさんの思い出を見いだす数多くの同窓生にとっても愛着の深いものであろう。

しかし、ユニフォームが学生の実習の場の学びを支えているという性格上、学生の体型の変化や、生活習慣の変化、実習場が聖路加国際病院にとどまらず、多岐にわたるようになってきたことなど様々な条件がユニフォームの見直しを迫っていることも事実である。

このような背景のもとに、昨年より学内に教員有志からなる「ユニフォーム検討委員会」が設置され、今年度からは決定権をもつ委員会組織として公認され、現在新しいユニフォームの検討を進めている。委員会は、新しいユニフォームを具体的に検討するグループと旧来のユニフォームの歴史を整理して資料として残す2つの作業グループに分かれてそれぞれの作業を進めてきた。本稿では、後者のグループの活動である旧来のユニフォームの変遷について報告する。

なお、この報告作成のために聖路加看護大学名誉教授 前田アヤ先生、聖隷クリストファー看護大学長 吉田時子先生、聖路加看護大学・前学部長 常葉恵子先生を始め多くの卒業生諸姉にご協力を戴いた。

### II. 本学ユニフォームの変遷

ユニフォームの変遷を大学の主な出来事にそってまとめたものが表1である。

以下、大学の歴史にそってユニフォームの移りかわりをみていきたい。

#### 1. 病院実習用ユニフォーム

##### 1) 第2次世界大戦前まで

大正9年、聖路加国際病院高等看護婦学校での看護婦養成が開始された直後は、白いユニフォームであった。これは病院で働く職員も学生も共通のものであったようである。(イラスト①参照)

昭和2年に聖路加女子専門学校が設立されてからは、淡いブルーに白いストライプの入った半袖のワンピースに、白いビブとエプロン、白いキャップ、黒の靴下に革靴というユニフォームを着用するようになった。(イラスト②参照)

生地は朝鮮ギンガムという生地で、前田先生の言葉を借りれば「洗濯によし、見栄えがよし、そして汚れがよく見えて、そしてきれいに見える」生地であった。洗濯は病院のリネンサプライで行われ、糊付け、アイロンもプロの仕事であった。昭和7年からは靴と靴下が白に変わった。高橋シュン元学部長が入学された年である。

その後、昭和15年前後の時期に入学後6カ月まではブルーの白い丸襟の付いたツーピースを着用し、入学後6カ月の戴帽式を終えるとストライプのユニフォームの着用を許されるという時期があった。

これはシスターの修行期間に倣い、戴帽を終えて初めて学生と認められるというものであった。戴帽式そのものは4年制大学に移行して7年間行われていたが、この6カ月までは学生でないという考え方は「学生は入学したときから看護を選択したStudentであって、再び宣誓するのはおかしい。」という声が生徒、教員双方からあがって廃止された。廃止後1年目は、茶話会形式のパーティーという雰囲気の中、看護を学ぶ先輩から後輩へという意味で、先輩からキャップを載

- 1) 聖路加看護大学講師 (精神看護学)
- 2) 聖路加看護大学講師 (公衆衛生看護学)
- 3) 聖路加看護大学助手 (精神看護学)

表1 <ユニフォームの変遷年表>

年代	主な出来事	病院実習	公衆衛生実習	卒業式	
1922(T 9)	「聖路加国際病院附属高等看護婦学校」設立	◆白の白衣ビブ着用 ↓ 絵①		◆白長袖、ブラックライン入りキャップ 絵⑧	
1927(S 2)	「聖路加女子専門学校」認可 (本科3年, 研究科1年)	◆朝鮮ギンガム地の薄いブルーストライプ使用、半袖、カフスに横縞、白キャップ、ビブ、黒靴、黒ストッキング(S7年に白靴、白ストッキングに変更) 絵② (但: 6カ月の余暇期中は別)	◆当初は左記と同様 ↓ ◆茶色ワンピース、白衿、黒(茶)ネクタイ、黒(茶)帽子あるいは麦藁帽子、黒マント、黒靴(研究科) 絵⑥	◆白長袖、ブラックライン入りキャップ 絵⑧ ◆研究科は、左記の茶ワンピース	
1930(S 5)	専門学校第1回生卒業				
1932(S 7)	卒業ピン(卒業バッジ)制定				
1934(S 9)	卒業年4年に延長(研究科廃止)				
1935(S 10)	公衆衛生看護学専修科(6カ月間)				
1938(S 13)	<2回生で廃止>				
1941(S 16)	校歌制定、校章・学生章作る。	◆生地が無くなった為に公衆衛生の茶色ワンピースを病院実習でも使用 ◆戦争中は、黒い国防服も使用		◆厚生科卒業生は茶ワンピースにビブ、その他は白半袖、白キャップ(日赤学生は別)	
1942(S 17)	開戦の為に「興健女子専門学校」と変更				
1944(S 19)	別科(2年)を付設し、中等教育・保健婦養成産婆学校の指定を受ける				
1945(S 20)	戦争体制の為、終業年限を3年に短縮。				
1945(S 20)	厚生科として1年の研究科設置 無限休校となる 終戦 中央保健所・院長宅にて授業再開 校名「聖路加女子専門学校」に戻す				
1946(S 21)	「東京看護教育模範学院」となり、日赤との合同授業	◆日赤病院での実習のために、合同となった2年目から、日赤と同じ白半袖ユニフォーム・白キャップ(日赤学生は赤十字入り)着用。			
1948(S 23)	研究科設置 ミス・ホワイต์第4代校長に就任				
1953(S 28)	旧校舎返還さて、日赤を引き上げる	◆アメリカから送られた様々なユニフォーム着用	●専攻科廃止まで専攻科で着用 ●病院での実習は現行ユニフォームにブラックタイ		
1954(S 29)	「聖路加短期大学」認可	<現在のユニフォームへ> ◆木綿地のスカイブルーの一色地使用・半袖、白衿、ビブ、白キャップ (但: キャッピング前は別) 絵③④ ●ミス・ホワイต์帰国後ビブ着用廃止 ●ギャザースカートから6枚はぎへ変更等の微調整あり ●S47キャッピング廃止 ●H5、キャップの着用は柔軟に対応 ●H5、ユニフォーム変更に関して検討開始 ●H6、現行のユニフォーム微調整 絵⑤	●白開襟ブラウスに黒(紺)スカートへ変更 絵⑦	◆現行ユニフォームにビブ、ブラックライン入りキャップ着用 絵⑨ ◆専攻科卒業生は長袖の白衣、上同キャップ 絵⑩	
1956(S 31)	ミス・ホワイต์学長に就任				◆大学卒業生は現在の黒ガウン黒角帽子着用へ 絵⑪
1958(S 33)	本館校舎の米軍接収解除				
1957(S 32)	1年の専攻科設置				
1957(S 32)	短期大学第1回生卒業				
1964(S 39)	聖路加看護大学認可				
1968(S 43)	大学第1回生卒業		(S57頃、白開襟ブラウスを色指定のみとし形は自由となる)	◆修士修了生は、現行 絵⑫	
1980(S 55)	修士課程設置		●現在、保健所実習に関しては実習先によって私服可	◆博士修了生は、現行 絵⑬	
1982(S 57)	修士課程第1回生修了				
1988(S 63)	博士課程設置				
1991(H 3)	博士課程第1回生修了				
1994(H 6)	(現在)				

せてもらったそうであるが、それ以後は全面的に廃止となった。

## 2) 第2次世界大戦中

昭和16年に太平洋戦争が勃発。白とブルーのストライプの生地がなくなるのにもない、公衆衛生の実習時に着用していた茶色のユニフォームを、病院実習においても着用していた。その後戦争が激しくなり、戦

火の中ユニフォームを着ることはままならなくなり、ズボンに上着スタイルの国防服を着用していた。

## 3) 第2次世界大戦後

昭和20年に終戦を迎え、昭和21年から日本赤十字専門学校と一体となり、GHQ指導のもと「東京模範看護学院」として再出発した。日赤に移ってから2年目頃にはストライプにビブという聖路加特有のユニフォ

ームと別れて、日本赤十字専門学校の学生と同じように白いユニフォームを着ることになった。しかし、日赤の学生のキャップにはレッドクロスがはいっており、キャップのみが別であった。

昭和28年に学生は築地にもどったが、物資に困窮していた時代であった。ユニフォームのきれはなく、買うこともできずに、学生は「つづれ錦」のようにつぎはぎしながらやっていたという。そんな時、米国から古いユニフォームが次々と送られてきて、体型にあった人からそれを着て、様々な種類の古いユニフォームを着てしのいだ時期があったということである。混乱した時代状況とともに、トイスラー先生に始まる本学の米国聖公会との深いつながりを伺い知ることができる。

昭和29年に学制改革により、聖路加看護短期大学として認可され、ミス・ホワイトが初代学長に就任した。短大1回生から、現行のブルーのユニフォームを着用するようになった。白い靴に木綿の白いストッキングをはき、ビブとエプロンをつけて実習をしていた。(イラスト③④参照) ユニフォームは木綿できており、とても着心地の良いものであったということである。現在に至るまでに、ギャザースカートから6枚はぎへ変更する等の微調整が行われたということである。

ところで、このユニフォームに用いられているブルーの由来であるが、ミス・ホワイトがはぎれを買に行き、気に入って買ったとか、ミセス・セントジョンの時代からブルーを使っておりミセス・セントジョンが好きだったからなど、色々な説があるが定かではない。最初からブルーが用いられており、それが長い年月の間聖路加カラーとして親しまれ、受け継がれてきている。ただ、ブルーといっても、その時々で様々なブルーがあり色は少しずつ違っていたということである。明るい海のような色のブルーであったり、それでは明るすぎるといってダークブルーにしたという具合にである。現在着ているものよりもはるかに鮮やかなブルーを用いていた頃もあったという。学部長であった前田先生が、檜垣先生とともに物の無い時代に生地を探し求め、馬喰町の生地問屋で大きなロールに巻かれた生地を買ひ、洋服屋に仕立てを頼んでいた。

現在は、入学と同時に大学で準備したユニフォームを各自が購入し、管理は学生自身が行っているが、全寮制の時代は貸与され卒業時に返却していたという。洗濯や糊づけは病院でやってもらっていた。当時の学生は看護行為を行うことができればいいというだけでなく、スカートやエプロンがしわにならないように、立ち居振る舞いに心を砕き、見栄えにも配慮していたということである。そして、ミス・ホワイト帰国

後エプロンとビブを着用するのは卒業式などの公式の儀式的時だけとなり、その都度大学から貸してもらうことになった。

平成になり、聖路加国際病院がナースキャップの着用について検討を重ね、平成4年に着用を自由化したのに伴い、領域毎で多少違いはあるものの、学生も病院実習時にはキャップをつけないことが多くなった。

平成5年にユニフォーム検討委員会が発足してから、学生へのアンケート調査をはじめとし検討を重ねてきたが、今年度は現代の学生の体型を考慮して微調整を行った。衿は止めボタンを増やし、ベルトは調節が可能なものにし、胸囲にはゆとりをもたせた。

(イラスト⑤参照)

## 2. 公衆衛生看護実習用ユニフォーム

### 1) 第2次世界大戦前まで

公衆衛生看護は大正14年の末期に、ミス・ヌノが公衆衛生看護を受け持つことから始まった。日赤から招いた社会看護婦4名と米国から留学を終えて帰国したアシスタント斎藤氏がユニフォームとして考案したのが茶色のワンピースであった。襟元には薄い編子の黒ネクタイを締め、オリジナルのピンをしていた。生地はギンガム、白と茶色の糸で織ったものであった。(イラスト⑥参照) 洋服のファッションの流行に応じて、ベルトの位置を上げたり下げたりしたといわれている。4、5年たつてから、ユニフォームと同じ生地で一人一人の帽子が作られた。靴は茶色で、靴下も茶色。茶色のオーバーコートがひとりずつ詭えて支給された。

### 2) 第2次大戦中

戦争中も生地の変更はあったものの、ブラウンのユニフォームは使われていた。

### 3) 第2次大戦後

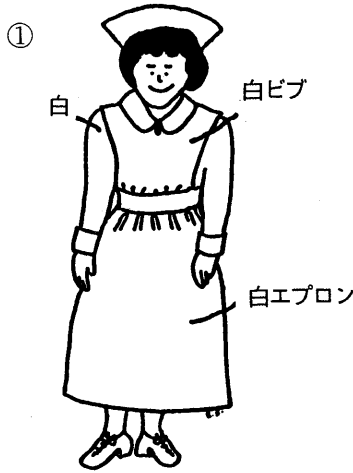
結局このブラウンのワンピースは、病院実習用のユニフォームが現行のブルーに変わった後しばらく使われていた。

病院のユニフォームがブラウンのスーツに変わった事を機会に、それまでの茶ワンピースを廃止し、現行のユニフォームにブラックタイの形となった。しかし、「鮮やかなブルーのワンピースにブラックタイでは目だちすぎる」と実習先の保健所からも指摘され、その後白の開襟ブラウスに黒(紺)のスカートに変更となった。

(イラスト⑦参照)

昭和57年頃から、白の開襟という指定も、色のみの指定でブラウスの形は自由になっている。また、スカートの形も動き易いものという程度にしている。現在では、実習先の保健所によっては「私服」としているところもある。

病院実習用  
ユニフォーム



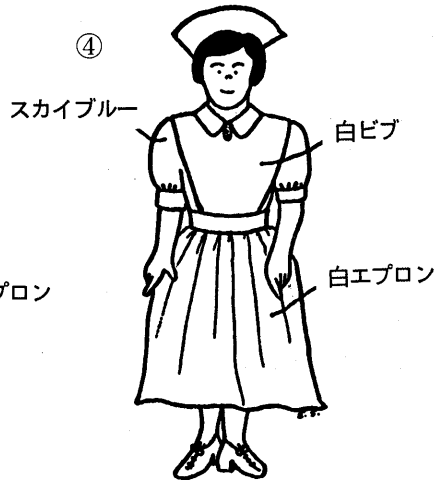
聖路加国際病院附属  
高等看護婦学校時代



聖路加女子専門学校時代



聖路加短期大学時代  
(戴帽式前)



聖路加短期大学時代  
(戴帽式後)

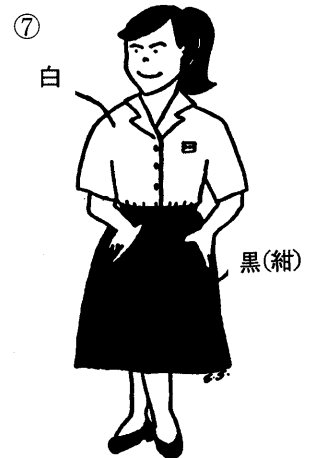


現在

公衆衛生実習用  
ユニフォーム

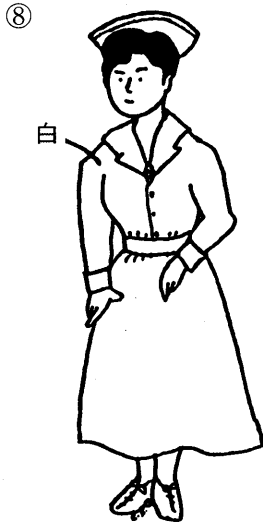


聖路加女子専門学校時代

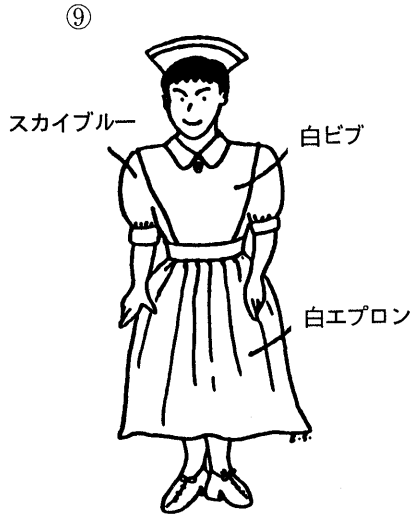


聖路加看護大学認可以後

# 卒業式



聖路加国際病院付属  
高等看護婦学校及び  
聖路加女子専門学校時代



聖路加短期大学時代



聖路加短期大学  
専攻科時代



聖路加看護大学  
看護学部



聖路加看護大学大学院  
博士前期課程



聖路加看護大学大学院  
博士後期課程

### 3. 卒業式

#### 1) 第2次世界大戦前まで

卒業式には、長袖の聖路加国際病院の旧ユニフォームとキャップを着用した。これはヘッドナース（現在の婦長）の服装である。このユニフォームは、卒業式のために誂えられたものであり、キャップの黒線は当初は聖路加の卒業生のみが着用していたものである。卒業時に現場のリーダーの服装をして式に臨んでいたことに、当時の本学の教育の目標と背景を伺い知ることができる。（イラスト⑧参照）

#### 2) 第2次世界大戦後

昭和31年、病院、本学とも、本館が米軍より返還され11年ぶりに本校舎にもどった。そして、卒業式がチャペルで行われるようになった。戦前と同じように、長袖の白いユニフォームに黒線のはいったキャップをかぶったヘッドナースの服装をして式に参列した。（イラスト⑧参照）

昭和32年に短大1回生が卒業している。短大生は、ブルーのユニフォームにビブとエプロンを着用していたようである。（イラスト⑨参照）

短大専攻科の卒業式では、卒業後は臨床指導者として働いていくということで、ヘッドナースの服装をして参列した。（イラスト⑩参照）

昭和39年に聖路加看護大学として認可され、昭和43年の大学1回生の卒業式から、現在着用しているガウンが使用されるようになった。（イラスト⑪参照）これは、大学になったことにちなみ、檜垣マサ先生をはじめとする当時の先生方が考案されたものである。また、現在卒業式には、在校生はユニフォームにビブとエプロンを着用して式に参列している。

昭和55年に大学院看護学専攻科修士課程設置（博士前期課程）が認可され、昭和57年に第1回修士課程修了者に修士号が授与された。修了式には、現行のように学部生と同じ黒いガウンの上に、金色とブルーのラインが入ったフードを着用し、角帽をかぶっている。フードにはポケットがついており、これは学識者としてこれからも知識を入れていくという意味がある。（イラスト⑫参照）

また、昭和63年には大学院看護学専攻科博士課程設置（博士後期課程）が認可され、平成3年に第1回博士課程修了者に博士号が授与された。博士号を授与された学生は、黄色とブルーのラインのはいったフード付きのベルベットのガウンを着用している。やはりフードには修士と同じくポケットがついている。博士のガウンには腕の部分には3本線が入っており、角帽の房は金色である。これは、前聖路加看護大学教授 都留春夫先生の私物のアカデミックガウンを見本にして、博士号を取得したという名誉を称え、その特徴をだす

ようにと檜垣先生が中心となって考案されたものである。（イラスト⑬参照）

### III. おわりに

創立80周年を迎え、本学は校舎の新築とカリキュラムの改正という大きな節目を迎えようとしている。その時を得て、数年来学生・教員間から希望があがっていたユニフォームも検討されることとなった。今回、ユニフォームの歴史を調べる途上で、私たちは時代の変遷の中でその時々学生が着用するユニフォームに心を砕き、努力してこられた諸先生方の姿を垣間みる事ができた。同時に当時の時代的な背景や文化、戦争との関わりなど、着ることの歴史は女性の生活の歴史であることも知ることができた。

時代は移り、学生の体型の変化、アトピー性皮膚炎などのアレルギー、アイロンかけや糊付けなどの作業が個人で担う場合困難となったこと、感染性疾患への対処など様々な要因を考えた上で、私達は学生との共同作業で新しいユニフォームを作り上げようとしている。作業の途上では教員・学生に共通してユニフォームに対する強い思い入れとこだわりがあることを快く感じている。その根底に共通するものは、本学への誇りと、ユニフォームとは、学生にとって上品で動きやすく着心地がいいものであり、そして見る人にとっても見栄えのよいものであるというこだわりである。それは、先人からの心意気でもあるといえるであろう。

本稿をまとめるにあたり卒業生諸姉にご協力を戴きました。イラストを書いて下さったのは、ユニフォーム検討委員会の初年度メンバーであった塩野悦子姉です。本稿のおわりにあたり、ご協力戴きました諸姉に心より御礼申し上げます。

（ユニフォーム検討委員会）

新ユニフォームデザイン検討担当：

操 華子，新井由美，南川雅子，三橋恭子  
変遷資料作成担当：

萱間真美，成木弘子，片平好重

### 参考文献

- 1) 1960 聖路加同窓会：聖路加短期大学創立40周年記念思い出のアルバム
- 2) 聖路加看護大学創立50周年記念実行委員会編：聖路加看護大学50年史
- 3) 聖路加看護大学創立70周年記念誌編集企画委員会編：聖路加看護大学の70年。